



撮影場所：小林市野尻町三ヶ野山 撮影協力：大角正廣さん
撮影データ：キャノンEOS-5Ds EF24-70ミリ F8 1/200秒 ISO感度400

今月は温室メロンを野尻町で栽培している大角さんを訪ねた。撮影当日はあいにく冷たい雨の降る日だったが、ハウスの中は加温されていて、居心地も良く、また大角さんの時折見える笑顔がとても印象的だった。大角さんは35年前から、メロン栽培を手がけ、栽培面積は34アールで毎年7、8トン前後を収穫している。素人にはもったいないように感じるのだが、栽培方法として一本の樹に一個だけしか実を残さず、他は全て摘果する。最終的に大角さんが目指すのは、一玉で重さが1キロ以上あり、糖度も14度以上で外観の網目も美しい宮崎ブランド「めろろメロン」を作り出すことである。糖度の高いメロンを作る秘訣については、その年の天候にも大きく左右される一方で、条件としては土地が寒暖の差のある場所であることや栽培に適した土地であることなど、また収穫の2週間前には、より糖度を上げるため燐酸系の肥料も使用する。考えてみると大角さんは、毎年同じ場所で連作障害も起こさずに良質のメロンを栽培してきたのだ。

輝く大地の哲学者たち。

写真家
黒木 一明

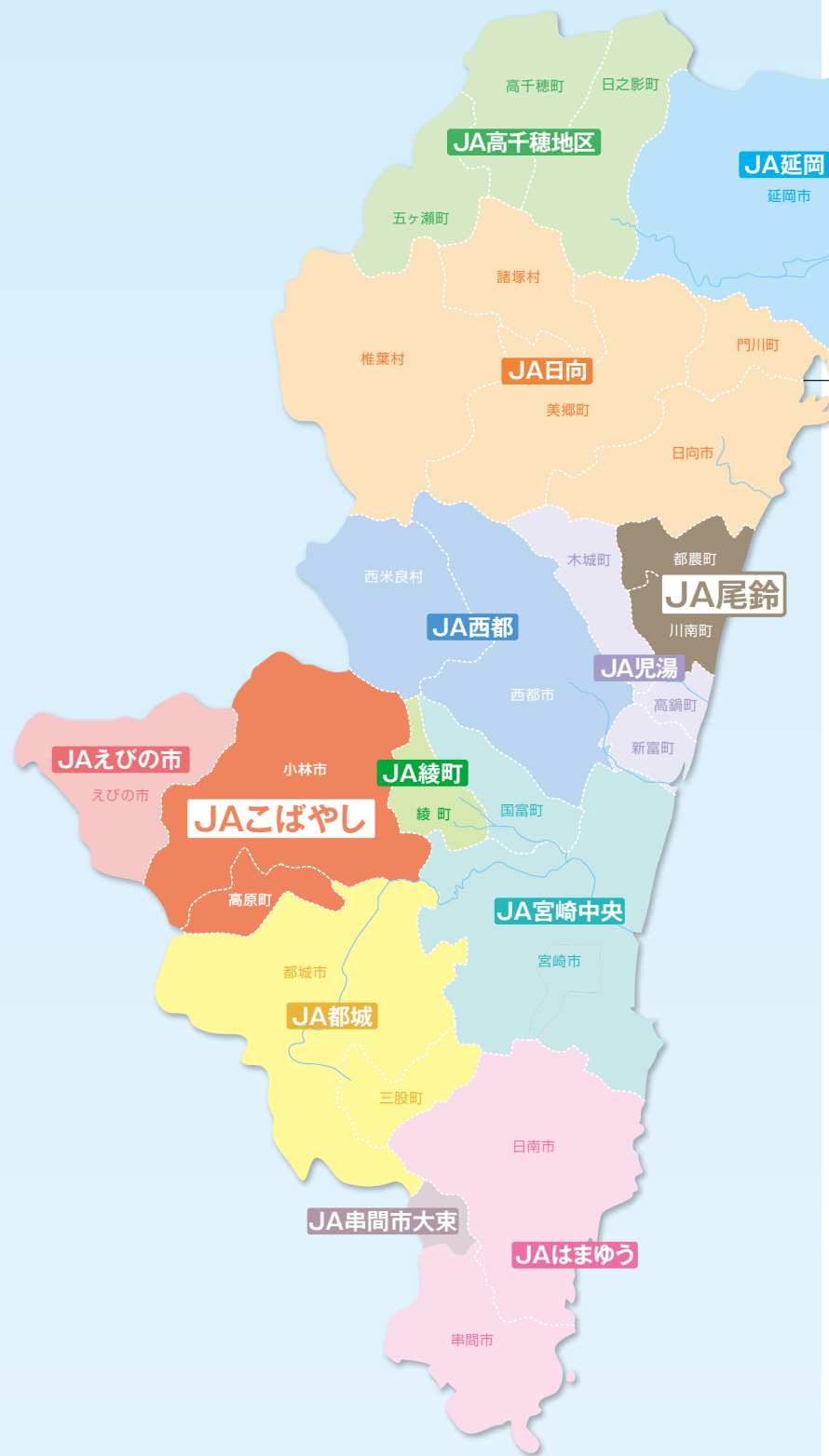


JA宮崎経済連
フォトコンテスト
審査員

■告知

写真教室開催（初心者向け）
西都市のカズスタジオにて、
写真教室（月2回）を開催中。
詳細は090-2398-2121
E-mail: kazkuroki0216@gmail.com
カズスタジオまで。

収穫後は土を消毒しソルゴーなどの緑肥をして翌年に備える。35年間の変わらぬ循環の中で、土地は次第に熟成され、メロン栽培に適した環境になったのだろう。メロンの出荷先は多岐に及び東京、大阪、奈良、福岡、大分など全国に出荷される。「メロンは一見、どれも同じ形に見えますが二度と同じものは作れません。そんなメロンをみんなが美味しいと言って食べてくれることが生産者としての冥利です。」と大角さんは語る。ともあれ、色々と説明を受けるよりも「百聞は一見にしかず」である。私は後日「めろろメロン」を食べてみた。食べた途端に芳醇な甘い香りが口の周りに広がった。それは口の中で直ぐに解けて消える白雪のように、糖度14度のブランドが保障する珠玉の味だった。最後になりましたが新年明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願い致します。



M モーション 1 January 2019

CONTENTS

- 表紙 イノシシさんの新年会！2019！
酒生 明子氏
- 1 新年挨拶
JA宮崎経済連 代表理事会長
新森 雄吾
- 4 輝く大地の哲学者たち。/黒木 一明氏
メロン
JAこばやし
- 5 グラビア
フォトコンテスト2017入賞作品
- 7 夢をカタチに
“農に帰る 大地に帰る” 若者たち
“ホルスグランプリ”が
呼んでいる
若い兄妹酪農後継者の
初夢を追う
宮崎県立高鍋農業高校
- 9 “日本一” ブランド王国の
素顔に出会う旅
新しい歳の「門出」を祝う
百花繚乱の“日本一”
スイートピー産地が
ときめく
JA尾鈴
- 11 輝く！女性のチカラ
農の現場からまきこのレポート
JA尾鈴川南女性部
フレッシュミズ リーダー
養豚農家
柳川 ひとみさん
JA尾鈴
- 13 ariさんの台所
ほうれん草
- 15 ミライ農キラ星
- 16 ネットショップアパス
今月のイチオシ
- 18 ニュース & インフォメーション
- 裏表紙 旬をお届け！プレゼントコーナー

あけましておめでとうございます！
本年も「日常生活を楽しく切り撮る！」をモットーにワールドを繰り広げていきます！
「宮崎の食材をかわいく飾る」をテーマにスタートしたこのシリーズ、全面写真にバージョンアップしてから、早くも10回目となりました。新春号は冬野菜たちが大集合です！
ブロッコリーの松、アスパラとほうれん草で竹、大根と人参で梅。そして寿にくり抜かれた人参と大根の旗をかがげ、京芋のイノシシたちが元気に走り回っております。
撮影後は温野菜で美味しくいただきました。皆様も冬野菜のあったかメニューでほっこりしてくださいね！
新しい年が良き年となりますように☆

さ こう あき こ
表紙制作・撮影/酒生 明子



農に帰る大地に帰る

若者たち



「青年よ大志を抱け」クラーク博士が開拓若者に呼び掛けたメッセージがよみがえろうとしている。次世代をみつめる、ひたむきな若者たちの情熱と感動を「農の回帰」のみやざきから発信する。

「ホルスタイングランプリ」が呼んでいる
若い兄妹酪農後継者の初夢を追う

宮崎県立高鍋農業高校



兄妹農高生の相澤龍斗さん(17歳)と莉菜さん(15歳)

初夢をカタチにする
若者たち

太平洋に面して宮崎県のほぼ中央に「文教のまち」高鍋町がある。

高鍋藩の時代から礼を重んじて知をみがくという「明倫の教え」で知られている。知と徳に優れた上杉鷹山に代表される人材を輩出してきた歴史教訓が今も暮らしの中に生きている。上杉鷹山は東北の米沢藩に出向して藩財政を建て直し藩主となった。

初詣でにぎわう高鍋藩主の居城「舞鶴城」にすぐ隣り合って宮崎県立高鍋農業高校があった。お城を思わせる石垣堀りに囲まれて校門正面には「ももみひめ 優秀賞 一席受賞」と大書きした横断幕が目に見え込んでくる。

平成29年9月に宮城県で開かれた全国和牛能力共進会で、選りすぐった和牛の中から出品した和牛が高校の部で総合2位を受賞した。そのとき宮崎県代表の宮崎牛が連続3回の内閣総理大臣賞を受賞している。

県立高鍋農業高校の学校要覧には、「ふるさとみやざきの農畜産業などに関する経営者や技術者を育て、ふるさとを元気にする起業家精神に満ちた職業人を育成します」と書いている。

農業県みやざきの農業リーダーを多数輩出してきた業績と114年の

伝統がある。
高鍋農業高校には畜産科学科、園芸科学科、食品学科にフードビジネス科も新設された。畜産科学科と園芸科学科は全員全寮制という、3年間寝食を共にして交友を深め、学業を濃縮する伝統の環境がある。

次世代を担う若者が挑む

畜産王国の情熱の砦は、本校西寄りの丘の上にあった。

樹木に囲まれた「舞鶴牧場」と書いたゲートをくぐるとエサをねだる牛の鳴声が歓迎してくれた。若者たちの動きが何となくあわたしい。白黒模様の乳牛の畜舎をのぞくと、乳牛を背に生徒たちが集まって熱心にメモをとっていた。

1年に一度ある乳牛の審査会なのだという。優秀乳牛は、どこをポイントに審査されるのか、自分たちが飼育している乳牛の育ち具合を確認しているのだという。

東京にある(一社)日本ホルスタイン登録協会から審査委員が駆けつけて指導していた。乳牛の骨格や乳房などの審査ポイントの説明に生徒たちの真剣さが伝わってくる。総合点90点以上だと「エクスレント乳牛」として最高評価されるが、農高飼育の乳牛からはまだ出ていない。

私たちの食卓に欠かせない牛乳は、どうやって生産されているのか酪農の世界をのぞいてみると、不思議が

いっぱい。

乳牛は妊娠して10ヶ月で出産する。出産して5日間は自分の子どものためにだけに搾乳して、それ以降は牛乳にするため搾乳して出荷する。次の出産がわかると出産前2ヶ月間は乾乳期間として搾乳しない。乳を搾る乳牛の出産回数は平均して3回か4回で8産という記録もあるのだという。

兄妹後継者の初夢は
「ホルスタイン日本一」

実習授業の中に兄妹後継者がいた。畜産科学科3年生の相澤龍斗さん(17歳)と1年生の莉菜さん(15歳)。農業高校で酪農家の兄妹入学はめずらしいのだという。

相澤兄妹の実家は、宮崎県南部の串間市の酪農農家で、子牛も入れて約60頭の乳牛を飼っている。

兄妹が授業中に乳牛の子牛に近づく、子牛のほうから柵越しに近づいてくる。何となく親近感を感じているかなと思ったりする。

兄妹とも実家の酪農後継者を目指している。兄の龍斗さんに進路を聞いてみると、農業高校で酪農技術の基礎を学習して、熊本県の畜産大に進学するのだという。さらに酪農家に研修留学して視野を広げて、実家の酪農の後継者を目指しているのだという。

「無意識に父の背中を見て育って

きた私が父を超すには何が必要なのか模索中です。」という答えがかえってきた。妹の莉菜さんは「生まれた時から乳牛の鳴声の中で育ちました。乳牛は家族の大事な一員です。動物というより友達です。東京オリンピックが開かれる2年後に都城市で全日本ホルスタイン共進会九州・沖縄ブロック大会が開かれます。地区予選もありますから、出場できるかどうか分かりませんが「グランプリ日本一」を目指します。」と目力のある表情で答えてくれた。

酪農担当教諭の福重美帆先生(39歳)は、琉球大学農学部を卒業して青年海外協力隊で中米のグアテマラで2年間、農業中学校で家畜飼育のボランティアを経験している。3年前に高鍋農業高校に着任した。

福重美帆教諭

「生徒たちと同じ目線で授業しています。目標をもって入学してきますから生徒たちの一途な情熱を感じます。生徒たちから逆に教わることもありますね。視野の広い後継者を目指してほしいです。」

高鍋農業高校で飼育した宮崎牛は、初めてふるさと自慢として高鍋町の「ふるさと納税」の返礼品としても活用される。



授業中の福重美帆教諭



乳牛の歩行実習



子牛と莉菜さん



搾乳実習



乳牛の審査授業



全国大会「総合2位」の横断幕



県開発の式部



あでやかな舞姫



白が美しいロイヤルホワイト

宮崎県も「世界にはばたく、みやざきの花」産地支援事業」などで産

1月には「尾鈴の花品評会」が開かれるほか、1月21日の「スイートピーの日」には東京、大阪などで華やかなスイートピーセレモニーイベントも開かれる。

JA尾鈴花き部会主催の花き品評会でも金賞を2回受賞している。白いスイートピーをさまざまな染色液に一晩浸すと、あざやかなさまざまな色彩のスイートピーが誕生するのだという。

JA尾鈴花き部会主催の花き品評会でも金賞を2回受賞している。白いスイートピーをさまざまな染色液に一晩浸すと、あざやかなさまざまな色彩のスイートピーが誕生するのだという。

純白の「ロイヤルホワイト」や目立つピンクは「恋式部」、青式部もある。宮崎県が開発した紫の「式部」や「舞姫」、グレース、濃い紫の「みやびのかなど」など黒木さんも8品種を栽培している。

JA尾鈴花き部会主催の花き品評会でも金賞を2回受賞している。白いスイートピーをさまざまな染色液に一晩浸すと、あざやかなさまざまな色彩のスイートピーが誕生するのだという。

分を適度に補給して茎や葉っぱの成長を促す。尾鈴山水系の小川上流から渓流水をホースで引いてため池をつくり、給水しているのだという。「手のかかる子どもを育てているようなものですよ。」と表情がゆるむ。右に左に色とりどりの色彩に、秘密がかくされているような気がして聞いてみると…。ありました。イタリアのシチリア島が原産のマメ科のスイートピーは、茎が7月ほどにも伸びる。

「百花繚乱」の不思議が隠されていた

分を適度に補給して茎や葉っぱの成長を促す。尾鈴山水系の小川上流から渓流水をホースで引いてため池をつくり、給水しているのだという。「手のかかる子どもを育てているようなものですよ。」と表情がゆるむ。右に左に色とりどりの色彩に、秘密がかくされているような気がして聞いてみると…。ありました。イタリアのシチリア島が原産のマメ科のスイートピーは、茎が7月ほどにも伸びる。

“日本一” ブランド王国の 素顔に出会う旅

“てっぺん” それは感動。アグリ王国には、“日本一”がいっぱい。
“てっぺん”を極める感動の不思議をドキュメントする。

新しい歳の「門出」を祝う 百花繚乱の“日本一”スイートピー産地がときめく

JA尾鈴

海水で身を清める
新春の「裸まいり」

太平洋の大海原に浮かぶ宮崎市の青島。
新年の海はどこまでも碧く、「鬼の洗濯岩」と呼ばれている帯状の奇岩がヒロウ樹の島を取り囲んでいる。「成人の日」の1月14日、恒例の「青島神社裸まいり」が行われる。老若男女500人余りが白衣などをまとって神輿を担ぎ海に入り、身を清める。南国といっても海水は身震いするほど冷たい。修行僧の荒行にも似た「裸まいり」で新年の幸せを祈願する。



青島神社の「裸まいり」のみそぎ

スイートピーの花言葉は「門出」

太陽がいっぱいの温暖な気候に恵まれた宮崎県は、「日本一」スイートピー産地。宮崎県のまとめでは、93戸の農家が1年間に2800万本（平成28年産・市町村報告）を出荷して「花の王国」。

出荷たけなわのスイートピー産地を探索した。

宮崎県中央部にあるJA尾鈴産地。太平洋に面して西側には尾鈴連山に取り囲まれて山すそに豊かな農地が広がっている。

「ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきて居り」



黒木正光さん(62歳)・江身子さん(60歳)の収穫作業

温暖な気候と知恵が花開く

黒木さんの家では、23アールのハウスでスイートピーを栽培している。気難しいスイートピー栽培に向き合って30年余りになる。

「こんなきれいな花に取り囲まれて、うらやましいですね」と話しかけると、途端に黒木さんの表情が厳しくなる。

「土方殺すにや刃物はいらぬ、雨の3日も降ればよいという戯れ歌があるでしょう。あれですよ。」

雨の日が3日もつづけば、スイートピーは花が開かない。花が開かないままつぼみが次々に落花する。火山灰土質なので乾きやすい。水

みやざきのふるさと歌人、若山牧水が詠った尾鈴山は、ふるさとのシンボル。花産地のJR都農駅前の広場にも、牧水の歌碑があった。牧水のお姉さんが都農町の金物屋に嫁いで牧水も徒歩で山越えして都農のまちを訪れていたのだという。

尾鈴山から流れ下る小川のほとりにスイートピーハウスがあった。寒い屋外からハウスの扉を開けて中に入ると、まさに「百花繚乱」。目を疑うほど色とりどりの色彩が目飛び込んできた。

スイートピーの花に埋まりそうになつて、収穫しているのが都農町川北の花栽培農家、黒木正光さん（62歳）と奥さんの江身子さん（60歳）。



宮崎県生花商組合連合会
会長 福岡直樹さん（54歳）



黒木正光さん(62歳)



スイートピー選別作業